

## 日本語支援者のためのブラッシュアップ講座 実施報告(2021年3月)

講座「学習者がもっと発信できるコミュニケーションの場作り」を実施しました。

- 目 標
- ・ともに地域に暮らす者同士としての、多様な文化や背景に配慮したコミュニケーションについて学ぶ。
  - ・教室で使えるスキルを学び、それを活かした活動をイメージし、学習者のよりよき伴走者になることを目指す。

日 時: 2021年1月21日(木)、1月28日(木)  
2月11日(木)、2月18日(木) 全4回  
19:00~21:00 (2時間)

場 所: オンライン

対 象: 横浜市内の地域日本語教室で支援を行っている人

参加者: 第1回 19名 第2回 19名 第3回 20名 第4回 19名 延べ77名

講 師及びテーマ:

第1回 地域日本語教室の学びって? 「学習支援」と「相互理解」の両立を目指して

萬浪絵理氏(公益財団法人 千葉市国際交流協会委嘱コーディネーター)

第2回 あなたが大切にしているものは? 多様な価値観を知る教室活動

渋谷実希氏(東京大学教養学部非常勤講師)

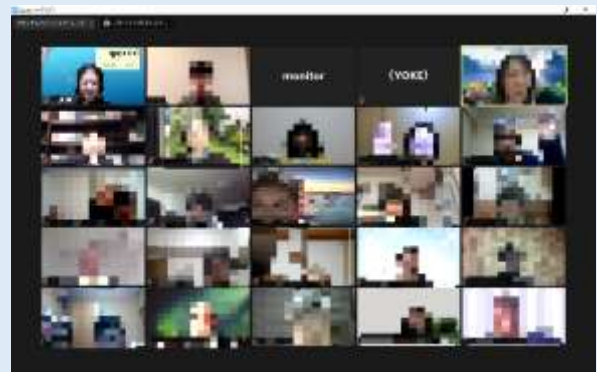
第3回 学習者が考え、話したくなる仕掛けづくり イラストからアプローチ

AYA(佐藤綾子)氏(株式会社インカレックス取締役・代表講師)

第4回 「わたし」を伝える教室活動 生活に身近なテーマで自己表現ができた!

萬浪絵理氏

ゲスト 朴美眞氏(特定活動非営利法人国際交流ハーティ港南台理事・副会長)



## 第1回 地域日本語教室の学びって? 「学習支援」と「相互理解」の両立を目指して

萬浪絵理氏(公益財団法人 千葉市国際交流協会委嘱コーディネーター)

全4回講座の第1回では、地域の日本語教室に求められているものや、「学習支援」と「相互理解」の関係について学びました。

まず学習者主体、対話中心の活動の一例として、ちば多文化協働プロジェクト「テーマでつながる日本語クラス」の活動が紹介されました。そこには、教える支援者と学ぶ学習者、という構図ではなく、やり取りを通してコミュニケーションの中から学習者が自発的に学んでいく姿がありました。

このような学習者が自ら発信できる活動を支えるためには、支援者にもスキルが求められます。その一つ“相手の話を受け止める”ことについて、「3つのきき方」というワークをして体感しました。

また、文化審議会国語分科会資料「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」をもとに、“自分がこの中で一番大切だと思うこと、これから身に付けなければいけないと思うことは何か”という内容でグループに分かれて話をしました。

講座の最後には、横浜市国際交流協会(YOKE)から、YOKEが取り組む学習支援事業や2021年8月に開設した「よこはま日本語学習支援センター」について紹介しました。

知識	技能	態度
(1) 日本語や日本文化、社会、多文化共生に対する一般的な知識・理解を持っている。 (2) 日本語教育に関わる機関・団体及び関係者による支援体制と自らに期待される役割について理解している。 (3) 学習者の来日の経路、国や言語・文化背景、日本語の学習目的に対する一定の知識を持っている。 (4) 異文化理解や異文化間コミュニケーション、コミュニケーション能力に関する基礎的な知識を持っている。 (5) 日本語の構造や日本語学習支援に関する基本的な知識を持っている。	(1) 分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。 (2) 学習者の発話を促すために、耳を傾けるとともに自身の発話を調整することができる。 (3) 日本語教育コーディネーターや日本語教師と共に、日本語学習を支援することができる。 (4) 学習者の状況を把握し、日本語教師や日本語教育コーディネーターの助言を得ながら、学習方法や学習内容を学習者に合わせて工夫することができる。	(1) 学習者の資質や現状を理解しようとする。 (2) 学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。 (3) 学習者や支援者などと良好な対人関係を築こうとする。 (4) 学習者が自ら学ぶ力を育み、その学びに寄り添おうとする。 (5) 異なる考えや価値観を持つ相手と協働できる柔軟性を持つようとする。

(備考) 表1「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」は、表1～10を併読とするものではない。



[r1414272\\_04.pdf \(bunka.go.jp\)](https://www.bunka.go.jp/r1414272_04.pdf)

出典:文化庁 文化審議会国語分科会

日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改訂版 P34



「よこはま日本語学習支援センター」紹介  
(参考:アクションプランより)

## 第2回 あなたが大切にしているものは？ 多様な価値観を知る教室活動

渋谷実希氏（東京大学教養学部非常勤講師）

第2回は、参加者が持っているビリーフ（あるものに対して人が抱いている、考え方や信念のようなもの）を改めて見つめなおし、多様な価値観の中で柔軟に対応することの大切さをテーマとしました。

まず始めに、学習者の多様性を活かす活動についていろいろな紹介がありました。一見、日本語学習とは無関係に思えるクイズを使って、学習者から積極的な発言を引き出すワークを行いました。参加者も学習者になりきって楽しんでいました。このような協働学習は学習者にレベル差があるときにも有効な手段であり、地域の日本語教室では、生活情報や生活の知恵を出し合うような相互の学びも可能になると思います。

講座中、強調されていたのが、学習者にとっての自己表現の大切さです。後半では、学習者の自己表現を助けるコミュニケーションの取り方について考えました。参加者は、提示された様々なシチュエーションを例として、各自のコミュニケーションスタイルを振り返り、また他者の話から新たな発見をする機会となりました。



“協働学習”を活用した教室活動を体験し、  
みなさん実践してみたくなったようです。

(YOKE スタッフ)

## 第3回 学習者が考え、話したくなる仕掛けづくり イラストからアプローチ

AYA（佐藤綾子）氏（株式会社インカレックス取締役・代表講師）

第3回は、学習者主体の活動にする、学習者から発話を引き出すための手段として、イラストを最大限に活用する方法について学びました。

日頃使っているイラストも、提示の仕方に工夫をすれば全く違う印象となり、より主体的な学習への助けとなります。活動をよりアクティブにするためのヒントがたくさんあり、多くの発見がありました。

スマホ世代にとって「見る」という活動はとても馴染みやすく、イラストを上手に使いえば、様々な活動に応用できます。支援者が教材の文章やイラストに対する視点を少し変えてみることによって、学習者が話したくなる仕掛けづくりをすることができそうです。

聞く、話す、書く、読む+見る

“5 技能”という考え方が参加者にとっても新鮮  
でした。 (YOKE スタッフ)



## 第4回 「わたし」を伝える教室活動 生活に身近なテーマで自己表現ができた!

萬浪絵理氏(公益財団法人 千葉市国際交流協会委嘱コーディネーター)  
ゲスト 朴美眞氏(特定活動非営利法人国際交流ハーティ港南台理事・副会長)

第4回は、千葉市国際交流協会で作成した“「わたし」を伝える日本語”という教材の使い方や狙いなどについて説明しました。マスターテキストアプローチという方法を使ったこの教材は、学習者が自律的に自己表現できるようになるように作られていて、各ユニットのテーマも生活に関連するものが多く、地域の日本語教室で使いやすいものになっています。

この回では、ゲストスピーカーを招き、自己表現活動の意義などについても話をしました。

「わたし」を伝える日本語



マスターテキストアプローチとは

複数の登場人物が、各ユニットのテーマについて自分の話をします。それをマスターテキストと呼び、学習者はマスターテキストを聞いて覚え、その話しぶりをモデルに自分の話することが目標です。マスターテキストには初級の語彙・表現、文型・文法事項が体系的に含まれているので、このテキストを覚えると同時に文法や語彙も習得できます。

出典:NEJ のひろば <http://nej.9640.jp/FAQ.html>

出典:「わたし」を伝える日本語

Youtube ⇒ [https://www.youtube.com/playlist?list=PLdvMCZD\\_p\\_eYwa9sHBFxcoXix2cAv\\_ehl](https://www.youtube.com/playlist?list=PLdvMCZD_p_eYwa9sHBFxcoXix2cAv_ehl)

### ★ゲストスピーカー 朴美眞氏★

現在はNPO法人ハーティ港南台で多文化共生に尽力されていますが、13年前に韓国から来日したときは、ご自身も日本語教室で学ぶ学習者でした。そこでの経験から感じたことやこれからの多文化共生の一翼となるみなさんへの期待などを温かい言葉でお話いただきました。

「教えよう」ではなく、「フラットな関係」で一人の人間として接し、  
学習者が発信しやすい雰囲気を作ってほしいです。

(朴美眞さんより)



全4回で開催された本講座で、すべての講師が発したのが「自己表現」という言葉でした。「自己表現」できない苦しさには思いをはせることができれば、私たちの目指す多文化共生社会に一步近づけるのかもしれませんが、ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。(YOKEスタッフ)